

残そう伝統ある

「手機織」を!!

望月知事、十日市場の手機織保存会を訪問

郡内織物の歴史は、一六三三年（寛永十年）秋元泰朝が郡内領主に処替えになった時代に遡ります。以来、秋元家は川越に移封となる一七〇五年（宝永二年）までの三代七十二年間、養蚕の振興や上州からの新技術の導入などによって郡内織物の育成を図り、現在の基礎を確立しました。

特に「海気」は明治初期、全国総生産高の七〇％を甲斐で生産したことから「甲斐絹」の異名をとったほどです。

この甲斐絹は主に郡内地方で織られたのですが、その集荷、出荷の中心となったのは、もちろん本市です。

その後、新繊維の誕生により、昭和十九年に甲斐絹は姿を消し、甲斐絹の伝統と技術を受け継いだ「甲州織」へと姿を変えてきました。

このような時代の流れのなかで失なわれつつある手機織の技術を若い世代に伝承してゆこうと、十日市場地区のお年寄数人が「手機織保存会」を発足させました。

最下のところは活動は初歩的で



ウールの袴地などの単純な素材を扱っていますが、最終的には「はたごしらえ」の作業を含めて「郡内つむぎ」まで織れるようになります。いと、情熱を傾けています。

六月十四日、梅雨のはしりの雨をついて、望月知事がこの保存会の作業現場を視察訪問しました。

「ふるさとづくり県民運動」の提唱者である望月知事は、「こういう地道な活動から地域の連帯を深めてゆくことが、真のふるさとづくりにつながる」と、大いに満足していました。

市内には、十日市場に限らず「手

機織機」が今なお、かなり現存していると思われます。

このような埋もれた織機を有効利用して、お年寄が若い婦人層に手機織りの技術を伝承してゆくこと

———こんな活動の広がりから、ものを大事にする心、人と人とのふれあいを大切にする心、が育くまれる筈です。

こうした意味からも、十日市場地区の活動の輪が広がり、全市のな盛り上りに発展してゆくことが期待されます。

都留市史編さん

事業にご協力を

都留市史編さん事業は、昨年五月にスタートし、準備段階を経ていよいよ本格的な活動が始まりました。

文化会館内の市史編さん室には専従の職員も配置され、資料収集解説などの作業も積極的に行われてはおりますが、市史はそのまま市民の歩んできた道程にもつながる重要な意味合いを含んだものなのです。

このことを考えると、官製の市史では真の地域の歩んできた姿を浮き彫りにすることはできません。また、資料についても、現在収集済みのものだけでは十分とはいえません。

そこで、どうしても市民の皆様のご協力をいただかなければなり

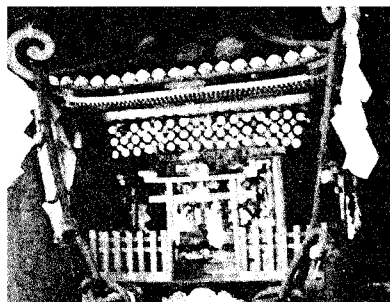
ません。

都留市史全体の構想については順次広報などを通じてお知らせいたしますが、市民の皆さんからのご注文なり、ご意見なりを積極的にお寄せくださるようお願いいたします。

市文化財

追加指定

都留市教育委員会では、文化財審議会の答申を受けて、金山神社（上谷六丁目）の神輿、広教寺（大幡）の大般若経、および、近年の発掘調査によって出土した遺跡出土遺物を、市指定文化財として、新たに指定しました。このたびの追加指定によって、市指定文化財は三十一件となり、県指定文化財三件と合せて、都留市を代表する文化財となりました。



金山神社のみこし

No.	遺跡名	所在地	出土遺物
1	馬々舟	十日市場	縄文時代前・中期の土器・石器
2	西畑	沢	縄文時代前期の土器・石器
3	久保地	大幡	縄文時代前・中期の土器・石器
4	生田山山頂	四日市場	縄文時代早期の土器・石器、および弥生時代中期の土器・石器
5	堀之内	小形山	奈良・平安時代の土師器・須恵器・鉄製品
6	宮脇	小形山	縄文時代前・晩期の土器・石器、および、平安時代の土師器
7	山梨原	狩	縄文時代早・後期の土器・石器、および、中世の土器
8	牛石厚	原	縄文時代中期の土器・石器、弥生時代中期の土器・石器、奈良・平安時代の土師器・須恵器・鉄製品
9	山ノ神田	原	先土器時代の石器および、縄文時代早・前期の土器・石器
10	三ノ側上	谷	奈良・平安時代の土師器・須恵器・鉄製品・古銭